



北総境町文哉難陳

雙雀叟贈湖宿同盟文

# 俳諧龍雀

文哉再陳

翠色軒

雙雀社裡三子辯破

濤

亭

藏版



このあやまのむしを力握ると我々の  
所の法よりよく利の如くは  
力も人を斬る所の所刻も  
かゝる心あるもあはれと  
さうもなれど強くと  
ものこととそけい  
とのこころは  
其向より  
かゝる心  
なす  
あ

昔々〜の終つてふ事くふる事〜  
 三子も時をさすかふか〜  
 一〜  
 けい〜  
 昔〜

物と舎漢藻

平次のと〜



世初文哉と係

余々〜  
 僧の形〜  
 山雀〜

松の影を多し 遠く 松の影を多し 遠く 松の影を多し 遠く  
松の影を多し 遠く 松の影を多し 遠く 松の影を多し 遠く  
松の影を多し 遠く 松の影を多し 遠く 松の影を多し 遠く  
松の影を多し 遠く 松の影を多し 遠く 松の影を多し 遠く  
松の影を多し 遠く 松の影を多し 遠く 松の影を多し 遠く  
松の影を多し 遠く 松の影を多し 遠く 松の影を多し 遠く  
松の影を多し 遠く 松の影を多し 遠く 松の影を多し 遠く  
松の影を多し 遠く 松の影を多し 遠く 松の影を多し 遠く  
松の影を多し 遠く 松の影を多し 遠く 松の影を多し 遠く  
松の影を多し 遠く 松の影を多し 遠く 松の影を多し 遠く

十一 月 廿 二 日  
塔 寺 署

西のうらぬ松の名をうらぬの山 一松  
まゝにまゝに松の名をうらぬの山 一松

入船も唄もろくろく直をりけり 栗折  
門扉を居る下 推す 如石  
約束の月も手紙もあつた 柏茂  
雪のうらぬ松の名をうらぬの山 孝子  
竹のうらぬ松の名をうらぬの山 又子  
糸のうらぬ松の名をうらぬの山 蘇丸  
いとくくも藤のうらぬ松の名をうらぬの山 千雷  
まゝにまゝに松の名をうらぬの山 思女  
瓜西瓜のうらぬ松の名をうらぬの山 其月  
お横場もまゝに松の名をうらぬの山 栄儀  
雪のうらぬ松の名をうらぬの山 栄儀  
まゝにまゝに松の名をうらぬの山 栄儀

土手外の畑も水もつらあ  
原居もつらあ静かな  
附たる小島も花も出さ  
との静かなるもの  
持てるい録能を頼む  
漕舟も船もつらあ棧橋  
連合もかまのつらあ  
祝儀もつらあ生 碑  
ろつらあつらあ湯もつらあ  
湯屋の柳もつらあ  
肩痛のつらあ程もつらあ  
お角持もつらあつらあ

松 折 石 茂 春 好 丸 子 思 舟 雲

サ新玉の難役もつらあ  
うさ小島もつらあ  
あつらあつらあつらあ  
静かなるもの  
岩草の味もつらあ  
つらあつらあつらあ  
静かなるもの  
つらあつらあつらあ  
つらあつらあつらあ  
つらあつらあつらあ

茂 石 折 好 子 雲 春 舟 儀

北総の難  
一 散舟もつらあ山もつらあ  
三 舟もつらあ山もつらあ

うききし妹お船はるききか

一 身三お船行つてる又船あし何ゆけり

一 四句目あきくしちきけりよききくはれ何ゆけり

ういゆふといふ聲あるものお船の音とあききき

雲の執しといふ世羨如何ゆけり

一同序の五句去の法武あり四句去ゆけり

法ハぬゆけ

又東條ゆけ云一 世中お文東ゆけの悪言具ハ謂きき自負の

世十より身ハ一松う病業本後ゆけの受身あききき

仲の能ゆけく夫お船あきききゆけ散ゆけり

心何の苦ゆけ一ゆけり 世中をゆくゆけゆけ

ゆけお船あききき本万年お船ゆけり

根を枯く申お船ゆけり 千年の色ゆけり

多き目出度松の歌ゆけり ゆけの山お死ゆけり

心何の苦ゆけり 根ゆけり

ゆけゆけ病業ゆけり 世中をゆくゆけ

里ゆけり 三お船ゆけり

せゆけり 世中をゆくゆけ

お船ゆけり 世中をゆくゆけ

友乃ゆけり 世中をゆくゆけ

ゆけり

富士山類ゆけり 世中をゆくゆけ

志乃ゆけり 世中をゆくゆけ

執りゆけり 世中をゆくゆけ

富士ありもねと船は其連向中洲川ありて山川の  
静しき船もよふ古今未嘗其の安んじたりと能く在  
のふと

勢田三郎山

海多し船の多し舟のふたふた

津中船をあらる 福 桐葉

二百年我此山小舟ありて 舟 舟

船のふたふた

山小舟ありて舟のふたふた

まのりし舟のふたふた 舟 舟

舟のふたふた 舟のふたふた 舟のふたふた

又舟三小舟ありて舟のふたふた 舟のふたふた  
隘のふたふたありて舟のふたふた 舟のふたふた  
里も舟のふたふたありて舟のふたふた 舟のふたふた

舟のふたふたありて舟のふたふた 舟のふたふた

舟のふたふたありて舟のふたふた 舟のふたふた

舟のふたふたありて舟のふたふた 舟のふたふた

舟のふたふたありて舟のふたふた 舟のふたふた

十六夜

舟のふたふたありて舟のふたふた 舟のふたふた

舟のふたふたありて舟のふたふた 舟のふたふた

舟のふたふたありて舟のふたふた 舟のふたふた

舟のふたふたありて舟のふたふた 舟のふたふた

舟のふたふたありて舟のふたふた 舟のふたふた

舟のふたふたありて舟のふたふた 舟のふたふた

舟のふたふたありて舟のふたふた 舟のふたふた

舟のふたふたありて舟のふたふた 舟のふたふた







板屋乃何の緒

物人走まふ不狂人も走ると物人争ふ中の情をか教す事  
居る人の心はさうさう高き人の心とさせんらやうさうさう  
免多き心はさうさう教まはせし<sup>1</sup>免多き心はさうさう免多き心はさう  
かたやめえ侍は只月調の人々思ふ事とて<sup>2</sup>免多き心はさうさう免多き心はさう  
一端はも成る人々<sup>3</sup>免多き心はさうさう免多き心はさうさう免多き心はさう  
人免多き心はさうさう免多き心はさう

世舟子もさうさう免多き心はさうさう免多き心はさうさう免多き心はさう  
免んをさうさう免多き心はさうさう免多き心はさうさう免多き心はさう  
法はあまふゆつ<sup>4</sup>の何んやさうさう免多き心はさうさう免多き心はさう  
素より<sup>5</sup>長人<sup>6</sup>免多き心はさうさう免多き心はさうさう免多き心はさう  
中<sup>7</sup>免多き心はさうさう免多き心はさうさう免多き心はさうさう免多き心はさう  
評<sup>8</sup>免多き心はさうさう免多き心はさうさう免多き心はさうさう免多き心はさう  
我道の本意はさうさう免多き心はさうさう免多き心はさうさう免多き心はさう







雲のふかき山影の宿をさしつゝふしの山 文彦

一白のうらみ流り流るるをわらうたぬ松の節をわらうと

さしつゝふしの山影の宿をさしつゝふしの山 文彦

あきの朝日なりし流るるはこころをさしつゝふしの山影の宿をさしつゝふしの山 文彦

入船も順をえ船の直をたけし 素朴

此船は酒の深のこころなり何船もたけしはあり

入船も順をえ船の直をたけし 素朴

門掃つ居る丁稚をさしつゝふしの山 文彦

約束の月も手紙を掃る船を 柏茂

手紙をひて船を引船をたけしつゝふしの山 文彦

子のうらみ流るるをわらうたぬ松の節をわらうと

あきの朝日なりし流るるはこころをさしつゝふしの山影の宿をさしつゝふしの山 文彦

入船も順をえ船の直をたけし 素朴

此船は酒の深のこころなり何船もたけしはあり

門掃つ居る丁稚をさしつゝふしの山 文彦

約束の月も手紙を掃る船を 柏茂

手紙をひて船を引船をたけしつゝふしの山 文彦

あきの朝日なりし流るるはこころをさしつゝふしの山影の宿をさしつゝふしの山 文彦

入船も順をえ船の直をたけし 素朴

此船は酒の深のこころなり何船もたけしはあり

門掃つ居る丁稚をさしつゝふしの山 文彦

約束の月も手紙を掃る船を 柏茂

手紙をひて船を引船をたけしつゝふしの山 文彦

あきの朝日なりし流るるはこころをさしつゝふしの山影の宿をさしつゝふしの山 文彦

入船も順をえ船の直をたけし 素朴

此船は酒の深のこころなり何船もたけしはあり



こころ〜〜 柳

と都をりりなるあまのゆきをれ 月

秋のゆきをれと〜〜 汁の考

岩舟の味を自惚ふ松葉進 好

かろ〜〜 子

白ふ粧をたよりゆき 子

小葉ま白ふ粧 肩解又丁種 西子姫 原居連合  
あ〜〜 尾出東〜〜 水承の  
統はぬお〜〜

餅あま〜〜 者

十人ゆき花の日和も 兼

氣のゆき友の 兼

早竟一巻の梅 露心 子 兼  
白ゆき多き 附〜〜 兼

日陰をの〜〜 兼  
其よハ書も兼〜〜 兼  
ハ終り地の 兼 兼  
の号 兼 兼





ちのり日記の友と主の絶世同答を主崔とて母子とあく  
まゝ一は一とあるまゝは信もふ取滑把酒た念ふ受罰且  
を家負強作富貴相もためてかのう裁ういや  
師のひのまうわきもあまゝんもつてかぬの痛く世を  
侍道と師の對して小癖を張るゝやめくやふ若き  
の爲めもはりのまゝと進んぬやあまふおはるゝ  
しと程も思ふふのなき成かゝもたして世を公め  
て成其の今ももむ截ありと終らんやと情やあまふ師の  
ひもう終るゝとこもたけを師と進んぬやあまふ師の  
終り地の一端ももあつて凡志とつてあまふの  
かゝるゝ人の望をひらんとあまふの思ひの





新故古交... 時の時をききとあとも残す 新故古交  
とゆふこと... ときひきやうん

... 永正の御世の新... 院中... 讀覺... 御世  
久唐... 御世の... 院中... 讀覺... 御世  
傳... 御世の... 院中... 讀覺... 御世

... 御世の... 院中... 讀覺... 御世  
久唐... 御世の... 院中... 讀覺... 御世  
傳... 御世の... 院中... 讀覺... 御世

... 御世の... 院中... 讀覺... 御世  
久唐... 御世の... 院中... 讀覺... 御世  
傳... 御世の... 院中... 讀覺... 御世

... 御世の... 院中... 讀覺... 御世  
久唐... 御世の... 院中... 讀覺... 御世  
傳... 御世の... 院中... 讀覺... 御世

行依... 文哉... 陳... 宗... 因...

... 御世の... 院中... 讀覺... 御世  
久唐... 御世の... 院中... 讀覺... 御世  
傳... 御世の... 院中... 讀覺... 御世

何... 御世の... 院中... 讀覺... 御世  
久唐... 御世の... 院中... 讀覺... 御世  
傳... 御世の... 院中... 讀覺... 御世

下







此道云々其れもまた世次の事とて書かざるに於て松尾半花の撰に極極  
書とて書のありてあるを道に他より極すも其の極すも其の極すも其の極すも  
ついでに名をあらわすも其れもまた世次の事とて書かざるに於て松尾半花の撰に極極  
のこゝろに道にありて極すも其の極すも其の極すも其の極すも其の極すも  
きりきりより其の師も其の極すも其の極すも其の極すも其の極すも其の極すも  
あるも其の道も其れもまた世次の事とて書かざるに於て松尾半花の撰に極極  
其の極すも其の極すも其の極すも其の極すも其の極すも其の極すも其の極すも  
とむむも其れ其れとて書かざるに於て松尾半花の撰に極極  
いとありて其れもまた世次の事とて書かざるに於て松尾半花の撰に極極

極極書其れもまた世次の事とて書かざるに於て松尾半花の撰に極極  
右の極すも其の極すも其の極すも其の極すも其の極すも其の極すも其の極すも  
其の極すも其の極すも其の極すも其の極すも其の極すも其の極すも其の極すも  
其の極すも其の極すも其の極すも其の極すも其の極すも其の極すも其の極すも

も其れもまた世次の事とて書かざるに於て松尾半花の撰に極極

孟子の序に韓子の言を引て曰堯は以是傳之  
之舞に舞は以是傳之為

昌黎の此言其れもまた世次の事とて書かざるに於て松尾半花の撰に極極  
あつたも其れもまた世次の事とて書かざるに於て松尾半花の撰に極極  
故其れもまた世次の事とて書かざるに於て松尾半花の撰に極極

祖孫曰千載の後も堯堯の血脈はたききりて其れもまた世次の事とて書かざるに於て松尾半花の撰に極極  
とて其れもまた世次の事とて書かざるに於て松尾半花の撰に極極  
風骨の極すも其の極すも其の極すも其の極すも其の極すも其の極すも其の極すも  
祖孫より傳つたも其れもまた世次の事とて書かざるに於て松尾半花の撰に極極  
とて其れもまた世次の事とて書かざるに於て松尾半花の撰に極極  
其れもまた世次の事とて書かざるに於て松尾半花の撰に極極



修も其道の下極は法を以て書てもさうさうか〜と俗の  
根根生さうさうさうの多き

霊神の神靈あり此神靈あり其の未定  
るあり極度にも祖翁の像をけし其の神を  
教をいふなり

何れ何れ熱信とてさうさうなり其の彼名も知りませぬハ  
蓋ふことなう〜霊神とてさうさう神靈とてさうさう  
顔倒の〜めし其の善ふ〜さうさうなり其の善ふなり其の口  
り〜さうさうなり〜さうさうなり〜さうさうなり〜さうさうなり  
から〜さうさうなり〜さうさうなり〜さうさうなり〜さうさうなり  
初〜さうさうなり〜さうさうなり〜さうさうなり〜さうさうなり  
〜さうさうなり〜

神あり〜さうさうなり〜さうさうなり〜さうさうなり〜さうさうなり  
〜さうさうなり〜さうさうなり〜さうさうなり〜さうさうなり  
の〜さうさうなり〜さうさうなり〜さうさうなり〜さうさうなり  
老柱の神あり此神あり〜さうさうなり〜さうさうなり〜さうさうなり  
〜さうさうなり〜さうさうなり〜さうさうなり〜さうさうなり  
遠慮者あり〜さうさうなり〜さうさうなり〜さうさうなり〜さうさうなり  
〜さうさうなり〜さうさうなり〜さうさうなり〜さうさうなり  
深慮の神あり此神あり〜さうさうなり〜さうさうなり〜さうさうなり  
〜さうさうなり〜さうさうなり〜さうさうなり〜さうさうなり  
唐山西神あり〜さうさうなり〜さうさうなり〜さうさうなり〜さうさうなり  
神あり〜さうさうなり〜さうさうなり〜さうさうなり〜さうさうなり

やうく極まるべしと云ふれし一書<sup>イキモノ</sup>を後集し

文章端古のうへに許さる源氏抄の多うにひらきかき  
とてうへにうへにうへにうへにうへにうへにうへにうへに  
しして極端文章の格式一とておしとておしとておしとておしとて  
此の世に通用のうへに其のうへに其のうへに其のうへに其のうへに  
とておしとておしとておしとておしとておしとておしとて

媚<sup>ヘラレ</sup>論<sup>ヘラレ</sup>のうへに其のうへに其のうへに其のうへに其のうへに  
其のうへに其のうへに其のうへに其のうへに其のうへに其のうへに

俗中の俗をうへに其のうへに其のうへに其のうへに其のうへに  
其のうへに其のうへに其のうへに其のうへに其のうへに其のうへに  
其のうへに其のうへに其のうへに其のうへに其のうへに其のうへに

鄙言めりせらば拙文めりせらば拙文通<sup>ト</sup>のうへに其のうへに其のうへに

ておしとておしとておしとておしとておしとておしとて  
ちかきしとておしとておしとておしとておしとておしとて

極まるべしと云ふれし一書<sup>イキモノ</sup>を後集し  
しして極端文章の格式一とておしとておしとておしとておしとて  
此の世に通用のうへに其のうへに其のうへに其のうへに其のうへに  
とておしとておしとておしとておしとておしとておしとて

極まるべしと云ふれし一書<sup>イキモノ</sup>を後集し  
其のうへに其のうへに其のうへに其のうへに其のうへに其のうへに

心こととおしとておしとておしとておしとておしとておしとて  
俗依文選中のうへに其のうへに其のうへに其のうへに其のうへに  
のうへに其のうへに其のうへに其のうへに其のうへに其のうへに



ともあり又を西よりの所へ其の院を遷すの事二丁  
おしりか  
ありや

祖翁の今既におしりかを遷すに及んで其の院を遷すの  
スツテニいふ義も其の院の義は行かぬ  
乃かすいふも其の院を出せしむるに心も其の院を遷すに及んで  
之に死す程も其の院を出せしむるに心も其の院を遷すに及んで  
を沙汰浅くも其の院を出せしむるに心も其の院を遷すに及んで  
わすれぬ事も其の院を出せしむるに心も其の院を遷すに及んで  
多しなり一なりありといふに文字の上にもありて其の院を  
其の院の鼻先のおしりかも其の院を遷すに及んで  
の文字も其の院を遷すに及んで

ありやうかすいふも其の院を遷すに及んで  
と際してすむも其の院を遷すに及んで  
其の院の鼻先の事

又考す十端なる事限りて其の院を遷すに及んで  
こといふも其の院を遷すに及んで  
こととて其の院を遷すに及んで  
其の院を遷すに及んで  
又其の院を遷すに及んで  
いふ山里は其の院を遷すに及んで  
よも其の院を遷すに及んで  
其の院を遷すに及んで  
其の院を遷すに及んで

新改の女ありたゆの字乃て分を屋たてし如きも一尋  
 ぬすむ可にニ条院の僧はし俗難しそ可きなりし  
 此後信の田上しつふ山里ゆ住あつふ田上しつふ山里ゆ師大細云  
 の住あつふしつふ山里ゆ住あつふ田上しつふ山里ゆ師大細云  
 あり師大細云者進ま住しゆあしつふ山里ゆ師大細云  
 あしつふ山里ゆ師大細云の田上の住居しつふ山里ゆ師大細云  
 うかしつふ山里ゆ師大細云の田上の住居しつふ山里ゆ師大細云  
 の文字力もつらん後のニ条院おれしも保之ニ条院のしつふ山里ゆ  
 後波あまのニ条院の僧はしつふ山里ゆ住あつふ田上しつふ山里ゆ  
 つしつふ山里ゆ師大細云の田上の住居しつふ山里ゆ師大細云

妻は家神を沙千ゆしつふ山里ゆ師大細云の田上の住居しつふ山里ゆ  
 ありしつふ山里ゆ師大細云の田上の住居しつふ山里ゆ師大細云

せつは、外外白ゆもかき本の目ゆもあつふ山里ゆ師大細云  
 知事のことしつふ山里ゆ師大細云の田上の住居しつふ山里ゆ  
 ありしつふ山里ゆ師大細云の田上の住居しつふ山里ゆ師大細云  
 字の傷をしつふ山里ゆ師大細云の田上の住居しつふ山里ゆ

神のふのぬのしつふ山里ゆ師大細云の田上の住居しつふ山里ゆ  
 ありしつふ山里ゆ師大細云の田上の住居しつふ山里ゆ師大細云  
 此のふのぬのしつふ山里ゆ師大細云の田上の住居しつふ山里ゆ  
 ありしつふ山里ゆ師大細云の田上の住居しつふ山里ゆ師大細云  
 白を引しつふ山里ゆ師大細云の田上の住居しつふ山里ゆ師大細云  
 ありしつふ山里ゆ師大細云の田上の住居しつふ山里ゆ師大細云

けしつふ山里ゆ師大細云の田上の住居しつふ山里ゆ師大細云  
 ありしつふ山里ゆ師大細云の田上の住居しつふ山里ゆ師大細云





もはゆき也

其名もろくし一書しつる云葉の種もまた草の力も思つた  
くある序又ゆり評せし海留信の唱ひもたゆり能くも  
ひとも願ふつと妙しきや

高山記を引く縁語のつと牛も書も縁語又吾山行と  
引く縁語のつとおれし人の向ゆ又惟徳留梁の兼亦競  
醒種つとつと醒種も鶴の縁語つとん彼文哉号縁語お  
りひぬく行止存松小鶴折も燕描も鶴書すの物ともしも人

東山つとぬ松の名高しつとやの山 又年

茶本茶名をわゆる多き根をうしつと茶と昔も  
つ中つと四時茶名つとつと君子の標とあつと  
おれ書つと清く千葉とたつとつと松とつとわつと

つぬつと白地つとあ見

冒霜つと屋裏つと古人のひたつとつと多りおと受ぬつと  
つとつと聞もつとつと松のたゆりおつとつとつとつとつとつと

或人詩秀出王其茶名欲隔松樹緑茶子山見  
相映自茶趣つとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

世詩の雅人の詩あつとつとつとつと不厭隔松樹つとつとつとつと  
んつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
まゆりつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと





んむらうのやうなまゝに

是哉の唐山水油のまじり

扱ふ

千聲唱ふくゝ観音の古名

其角

船のうら涼とふくくしの川信

松風

うまいぬくぬくの言をゆつと道に共出さうきう扱ふ

あゝあゝ

こゝろ前より師の教あつて年刻しち成の程は存とて  
照るゝ能く治ちまのや

因ぬりから扱ぬものをも師の扱ふの行違ふ  
そ何とてをせしむぬの出やゝゝ扱ふつゝぬ出ぬ  
ぬぬ彼々事とて行しぬぬとてさゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝありかゝゝぬぬ對し何れも馬耳は念經をん

才三の大意に教信の扱ふ事一扱ぬもの扱お  
あそこの方治く去るゝゝ扱の場あまゝとてを扱  
ぬ扱るゝ何れ運むぬぬとて扱とて其所ぬ  
とてとてぬゝゝゝ

扱取扱合ゝのりかゝるゝあはれゝゝゝゝゝゝゝ  
と扱の事乃今もゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

うまゝゝゝゝゝ扱と字をうまゝゝ扱とて扱るゝ  
扱川の扱ぬ扱むゝゝ何れをゝゝゝゝゝゝゝ  
あゝゝゝゝゝゝゝゝ扱とて酒扱のりぬぬぬ  
扱扱のりぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
あゝゝゝゝゝゝゝ

おのまゝ非を掩へん述却してきうあまゝ下郎のまゝを引



在るおれらに久を掃也と思つてとんえあり笑お掃る  
ことおれら

爰お四白目のあしびらつらハ散る程の意おそれ  
きて身三お附をさしとらるあり

四白目のあしびらつら

きこえてお前白の控格おとる應きこりめて其る其  
因の變化をさるこ

前白の控格おとるこ例の道解を

門をさるもさるもさる他あり身五白目約束の月  
んお多き掃る風遊人も前お越しのお掃をあり  
そかお人の白意ハハのあしびらつらハ泥のお掃お  
しと越白のせおる泥の扱おめとてさるこ

泥のお掃のその成互角お出せり成引裂るはつらお合  
掌もお氣おさるこもつら掃おとる遠く

あるハハの利澤をさるひ約束の月をさるハハは  
難くこせゆらつら白化の素おる一也お掃お  
世の中の子種をさるこあるは後白一奪おるこ  
附合はたのうお掃のまこしびらつら也

轉のまこしびらつらお掃の附とつらまされはつら附とる  
お掃おとるこ也

草のうらつら葉おとる虫の音 孝存

新雪のうらつら葉おとるこおとるを体お言おとるこ  
うらつら葉おとるこおとるハハお掃おとるこおとるハハお掃  
おとるこおとるこおとるハハお掃おとるこ

何れ亦其本意を多量に影寫のうらまをいつるの解きもゆゑ  
の道解あり

荒増の如き神もあはれは 文子

世に其ありきも一もふま方の若徒状をんてまふあり  
さうさうのふを能くまきまふ自分の意味は押あて  
いふべきもなまもあつてさうさうさうさうさうさうさう  
ともありあつて神もあはれは神もあはれは神もあはれは  
世に其ありきも一もふま方の若徒状をんてまふあり  
さうさうのふを能くまきまふ自分の意味は押あて  
いふべきもなまもあつてさうさうさうさうさうさうさう  
ともありあつて神もあはれは神もあはれは神もあはれは  
世に其ありきも一もふま方の若徒状をんてまふあり  
さうさうのふを能くまきまふ自分の意味は押あて  
いふべきもなまもあつてさうさうさうさうさうさうさう  
ともありあつて神もあはれは神もあはれは神もあはれは

列記をまふありの形は其れもあつて文字書さるるは  
業めして師の言ふる筆剣の意もあつて  
世に其ありきも一もふま方の若徒状をんてまふあり  
さうさうのふを能くまきまふ自分の意味は押あて  
いふべきもなまもあつてさうさうさうさうさうさうさう  
ともありあつて神もあはれは神もあはれは神もあはれは  
世に其ありきも一もふま方の若徒状をんてまふあり  
さうさうのふを能くまきまふ自分の意味は押あて  
いふべきもなまもあつてさうさうさうさうさうさうさう  
ともありあつて神もあはれは神もあはれは神もあはれは

年礼を師の下人お伺いして 了寛

存懐をかかふは其れもあつて 翁

持つたぬふち刀を右めくともあり 湯子

福東の川を一さけ 愛おすあり 了寛

十一年のころの業はつてあり 了寛

下

さうの葉が小紙でしておもしろい  
古園  
字跡

芝の場をさうさうのうらな  
葉糸  
梅井出て初瀬やすし 櫻井をのり 小舟

世間の家内御おんごのふゆのりゆめてはの儀玉と稱し  
小舟が小紙も小舟が生れ小舟の通称も御ごの葉も  
あり小の葉もさうさうの葉も初瀬も初瀬の地名もさう  
漸く初瀬も若成り白鳥も大舟お通せり

御沙井おた刀足落しあつて 小舟さうさうの葉もあつて  
さうさうの葉もあつて白鳥もあつて小舟もあつて御ごの葉もあつて  
字あり次つて漸く御ごの葉もあつて御ごの葉もあつて御ごの葉もあつて  
さうさうの葉もあつてさうさうの葉もあつてさうさうの葉もあつて

さうの葉が小紙

助舟の偏利紙の字体も御ごの葉もあつて御ごの葉もあつて御ごの葉もあつて  
御ごの葉もあつて御ごの葉もあつて御ごの葉もあつて御ごの葉もあつて御ごの葉もあつて  
御ごの葉もあつて御ごの葉もあつて御ごの葉もあつて御ごの葉もあつて御ごの葉もあつて

助舟の偏利紙の字体も御ごの葉もあつて御ごの葉もあつて御ごの葉もあつて  
御ごの葉もあつて御ごの葉もあつて御ごの葉もあつて御ごの葉もあつて御ごの葉もあつて  
御ごの葉もあつて御ごの葉もあつて御ごの葉もあつて御ごの葉もあつて御ごの葉もあつて  
御ごの葉もあつて御ごの葉もあつて御ごの葉もあつて御ごの葉もあつて御ごの葉もあつて

うらまえてあつらひさうむい自分のまじき女業への悔し  
まのまじき世徳本のゆり返りあけさく男をまじく  
おまじきまじきまじきまじき人情の風骨あり

つのおまじきまじきまじきまじき一巻お人妻の恋をのまじきまじき  
まじきまじきまじきまじき又人情の風骨をまじき新他意をまじき抱  
腹まじき

うらまえてあつらひさうむい世徳の白く批判の筆をアアアアア  
附白の法をアアアアアおまじきまじきまじきまじきまじき  
後白の白化をまじきまじき法式

評まじきまじきまじきまじきまじきまじきまじきまじきまじき  
まじきまじきまじきまじきまじきまじきまじきまじきまじき

南方をまじきまじきまじきまじきまじきまじき 左好

世間通用のまじきまじきまじきまじきまじきまじきまじきまじき  
まじきまじきまじきまじきまじきまじきまじきまじきまじき  
の悔を返すまじきまじきまじきまじきまじきまじきまじきまじき  
後七のまじきまじきまじきまじきまじきまじきまじきまじき  
まじきまじきまじきまじきまじきまじきまじきまじきまじき  
あり白意のまじきまじきまじきまじきまじきまじきまじきまじき

赤まじきまじきまじきまじきまじきまじきまじきまじきまじき  
おまじきまじきまじきまじきまじきまじきまじきまじきまじき  
まじきまじきまじきまじきまじきまじきまじきまじきまじき  
師のまじきまじきまじきまじきまじきまじきまじきまじきまじき  
まじきまじきまじきまじきまじきまじきまじきまじきまじき

赤まじき

の希列 多めあしきくく小児ゆもおとどき鳴呼の者うか

土手外の相も出氷ゆつふあーり 松

階居仕くゆ小鷄卵實あむ 柳

附くく小魚ゆ是もる急出ーり 石

ー為哉ーりーりーあふーあふーかーのー

ハ古人の化例ゆえんき道とも毎の字並の字あし

くくもあてくるゆて痛ゆ乃乃去あーく其ゆあ道

ハ銘急も色ゆーくあふあ其二三をあけてあふもの

書ハまの三史又遣うーりーゆー 信通

唐録おーやー空のうああ 游刀

おきくあふ龍を強ゆあまーりー 呂房

おまのま 一西ゆ出て土着うまを遣あし 翁

あま中ゆ月をきえーりー 山店

神明のひつーりーりー海内もふし 翁

古集をくえんたゆーりー志まあゆりーりーまま集多の撰を引出を

あうーりーりーも船の種並の依帖ハ書ゆああゆ文ちまの三史

又遣うーりーゆーりーりーゆーゆゆも麻忽あふそのこーりーか

百集の書本を覧まーりーりーるるいまゆりーりー近き湖中ゆ一集

集の類んをも大うーりーりーりーりーりー

神明のゆも沙汰もあまーりーりー古集を以味せまーりー撰あ

文あハゆーりーかき<sup>ダロニガ</sup>頑愚の小人ゆふ小もあーりーりーりーりーりー

ハ<sup>カ</sup>心ゆあゆゆもせんをゆあーりー

穿巻のまゆゆーりーゆゆおもひ遠ふふーりーりーりーゆゆ

ゆーりーりーゆゆおのまゆゆあゆゆゆゆゆゆゆ

抄







角折りと世おもしろくしむるをあらはせしむるに  
後こそはあまも違ふもかゝるもいふもあつたらんか  
是れと仰くも違ふもあつたらんか  
多るめて運び扱ひしつゝこそは扱はれしつゝはたまたま  
あつたあつたつゝはたまたま扱はれしつゝはたまたま  
扱ひのこそは也自他の備はれしつゝはたまたま  
しつゝはたまたま扱はれしつゝはたまたま  
縛るも場あま師を大ましくしつゝはたまたま  
口のこそはしつゝはたまたま扱はれしつゝはたまたま  
肩解のこそはしつゝはたまたま扱はれしつゝはたまたま  
お角折つてくもあつたらんか  
後のおもしろくしむるをあらはせしむるに

ち付のおもしろくしむるをあらはせしむるに  
多るめて運び扱ひしつゝこそは扱はれしつゝはたまたま  
あつたあつたつゝはたまたま扱はれしつゝはたまたま  
扱ひのこそは也自他の備はれしつゝはたまたま  
しつゝはたまたま扱はれしつゝはたまたま  
縛るも場あま師を大ましくしつゝはたまたま  
口のこそはしつゝはたまたま扱はれしつゝはたまたま  
肩解のこそはしつゝはたまたま扱はれしつゝはたまたま  
お角折つてくもあつたらんか  
後のおもしろくしむるをあらはせしむるに

五代白藤三代梅孝の優技らん  
執拗老の今の  
お角折つてくもあつたらんか



梅の香の夢も此の娘お袋尾町宿の王女房  
御子浪人法師嫁を夢のうたをうたふあり

古人の妙法をまじへてつく句のおもてのこころを  
教へてまじへて候りふも是を言はれしを  
あへてまじへて多くは他より習得するに  
集まらざるべしといふは候りまじへて  
出せしものも是ゆいふ事なり

氣のあふ友の枝ふ若葉 儀

揚句のつゆは葉ていつか一葉う賀草あるは  
候はるは葉ふあまのり先陣も出まら  
葉うまふふをよ葉をさるはたふか  
のやうにも葉ふ人と心おつゝ

36 浦の候はる程のつゆは葉ていつか一葉う賀草あるは  
候はるは葉ふあまのり先陣も出まら

うまうまと言のめく心も人共取ま  
弟の意んは母の抱もいもまら  
私の病意は程はむらう十の葉の  
まはるは葉ふあまのり先陣も出まら  
あふまも同葉のり先陣も出まら  
まはるは葉ふあまのり先陣も出まら

筆戦もつゆは葉ていつか一葉う賀草あるは  
候はるは葉ふあまのり先陣も出まら

師の書とすの書は對しては

法

新發結之、美儂、はらふ、を、結、る、お、る、  
も、結、つ、る、結、ま、る、を、法、冊、を、ま、る、を、家、  
い、お、る、の、理、を、ま、る、を、結、る、を、結、る、お、る、  
多、お、る、理、を、ま、る、を、結、る、を、結、る、お、る、  
お、る、の、理、を、ま、る、を、結、る、を、結、る、お、る、  
交、形、舞、と、お、る、結、ま、る、物、を、お、る、結、ま、る、  
ら、結、る

奉  
交、形、舞、と、お、る、結、ま、る、

一賢  
香妙





